

## 講演概要

### アートが人をつなぐ ～社会的処方×アートの視点～

服部 正（甲南大学 文学部人間科学科 教授）

2023年から「雑談・屋台カフェ」という活動をしています。月に1回のペースで、お昼に学生と一緒に屋台を出して、雑談5分と引き換えにコーヒーを無料で提供するという取り組みです。近年は効率主義が尊重されていますが、そのようなゆとりのなさは、生活の息苦しさや、クリエイティブなアイデアの枯渇につながっているとも言われています。そこで、このようなカフェを出して、少しでも立ち止まって雑談をする時間を作ろうと考えました。

この活動を始めるきっかけのひとつは、社会的処方について知ったことでした。医師の孫大輔先生や守本陽一先生の健康相談の屋台カフェを参考に、縦割りの組織に横串を通すような、組織のメンテナンス、学生とのコミュニケーションの場づくりを主目的として取り組んでいます。社会的処方では、望まない孤独の解消のために、集える場所、話せる場所が必要だと言われています。そのような場所として、イギリスでは美術館、博物館の役割が注目されています。今回はその一例として、対話型鑑賞と呼ばれる鑑賞方法を実演しました。

パブロ・ピカソの作品を例に、何が描かれていますか、それはどのように描かれていますか、季節はいつ、場所はどこ、などの問いかけをしてみました。対話型鑑賞では、作品を鑑賞しながら意見を出し合うことを通じて、多様な考え方に触れる、会話の中からアイデアが広がる体験ができます。

その実例として、川内有緒さんの『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』（集英社、2021年）という書籍も紹介しました。ここには、全盲の白鳥健二さんと一緒に絵画を鑑賞することで、普段よりも絵が見えるようになる、白鳥さんに絵を説明しているようで、実は白鳥さんの存在によって絵を見せてもらっているということが書かれています。このことは、健康に関する別の問題、ケアとは何かという問いにもつながります。村上靖彦さんの『ケアとは何か』（中公新書、2021年）の一節を引きながら、ケアの双方向性についてお話ししました。聞き取ろうとする努力、分かろうとする努力、伝えようとする努力は、ケアそのものであるということです。

最後に、ケアと芸術の関係について、砂連尾理さんが舞鶴市の特別養護老人ホームで認知症高齢者の方々と行っているダンスワークショップ「とつとつダンス」や、焼き物の屋台を町中に設置して絵付けとお茶会のワークショップを展開するきむらとしろうじんじんさん、障害のある人と誠実に向き合い二人の間でしかできない表現を探っていった山村幸則さんと森口敏夫さんの活動などを紹介し、生活の中にアートの要素を取り入れることで双方向

的なケアの場を作り出すことが可能であり、それは心身の健康にも役に立つということをお伝えしました。